

(1) 岩手県災害ボランティアセンターの設置

3月11日の夕方、度重なる余震の発生がようやく減ってきた中で、岩手県防災会議「岩手県地域防災計画」に基づき岩手県社会福祉協議会（以下、「県社協」という）内に「岩手県災害ボランティアセンター」（以下、県災害VC）を設置しました。災害対策本部会議を開いても、甚大な被害を受けた様子を映すテレビの情報以外にはなにも得られないまま、管理職が当直する体制で一夜を明かしました。

発災直後は停電で電話も不通になり、市町村社会福祉協議会（以下、「市町村社協」という）との連絡も一部、個人の携帯電話とメールが断続的に通信可能な状況で、沿岸市町村社協職員に情報収集を試みるも相手も被災の全容を知る術もなく、自身の周囲の情報しか得られない状況の中では、テレビ・ラジオで見聞きする報道情報に頼らざるを得ませんでした。

県社協が入居するふれあいランド岩手でも、限られた備蓄燃料で自家発電しながら、被災情報は公用車から持ち出したカーナビのテレビで被災地の様子を食い入るように見るだけでしたが、想像を絶する甚大な被害に見舞われたことだけは皆が理解し茫然としました。

翌3月12日以降、少しずつ電話が復旧しつながり始め、内陸部の市町村社協と連絡が取れるようになると、徐々に各社協の状況や、避難者への支援状況が明らかになって来ました。

しかし、盛岡市内から沿岸部へ向かう道路の通行止めや、燃料不足による車両燃料確保の難しさなどから、沿岸部に赴くことができず、沿岸部市町村に隣接する遠野市社協や住田町社協に現地の状況把握を依頼しました。

ふれあいランド岩手のある盛岡地区で電気が復旧したのは、3月13日の正午頃で、それまでは、道路は信号も点かず、閉鎖された高速道路から一般道に溢れた車が列をなして、交差点を横断できない状況で、自動車も一旦交差点を左折して、次に右折するしか道路を横断する方法がありませんでした。

その後も、しばらくの間、燃料の供給が少なく、給油待ちの車が1車線を塞ぐなど、給油渋滞が各地で起こる状況は4月中旬まで続きました。

県社協職員もガソリンスタンドでの給油が出来ず、通勤に支障が出る職員もいる中、可能な範囲で情報の収集に努めるとともに、自主的にふれあいランド岩手に避難した方々のため、任意の避難所運営が始まりました。避難所運営には宿直する職員も必要になり、ふれあいランド岩手の職員の勤務体制の見直しも行われました。

3月14日、沿岸被災地は立ち入りが制限され、岩手県が発行する車両通行許可書が必要となりました。県社協は早速申請し、沿岸部に行く準備が進められました。

3月15日には、全国社会福祉協議会（以下、「全社協」という）、中央共同募金会（以下、「中共募」という）と過去の大規模災害発生時の災害ボランティアセンター運営実践者等で構成する災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（以下、「支援P」という）石井布紀子幹事と、メンバーの新潟県柏崎市社協山崎博之主事が県社協支援のため来訪し、支援Pと職員が同行する形で、15日から、沿岸各市町村を訪問し状況確認が始まりました。



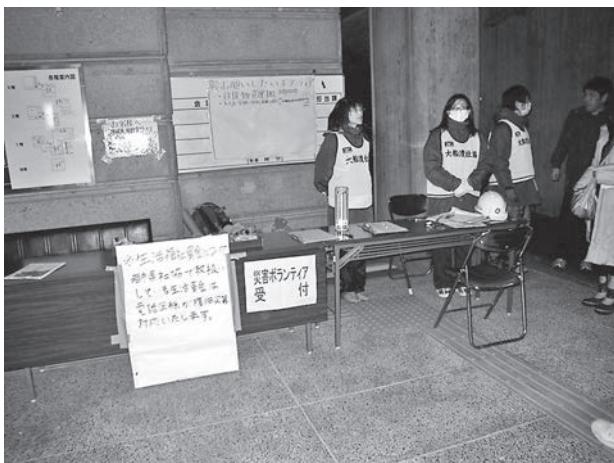
[3月13日の県社協事務所内]

(2) 市町村社協災害ボランティアセンターの開設

東日本大震災では沿岸部を中心に、県内11市町村
社協の役員、理事、監事、評議員、職員本人が33名、
同家族49名計82名の尊い命が犠牲になりました。

また、5市町村社協で本部施設が流失・全壊及び一部損壊と甚大な被害を受けました。

沿岸各地の市町村社協は、被害状況を把握する中で、避難所や被災者、被災地域への支援を行なが



〔大船渡市社協は3月12日、市役所前で災害VCを設置〕



[釜石市社協は郷土資料館で災害VC設置]



【沿岸被災地VC】

《被災地：重點支援先》

宮古市、大船渡市、陸前高田市、釜石市、大槌町、山田町、野田村

《被災地》

久慈市、岩泉町、洋野町

【内陸部後方支援VC】

《宿营地》

遠野市、住田町、盛岡市（旧川井村）

《ボラバス運行実施》

盛岡市、花巻市、北上市、久慈市、
遠野市、一関市、二戸市、八幡平市
奥州市、零石町、滝沢村、金ヶ崎町

«その他»

葛巻町、岩手町、紫波町、平泉町、
軽米町

社協名	人的被害(死亡・不明)	本部施設	介護事業等
野田村社協		流失	
宮古市社協	職員 1 人		収益激減
山田町社協	評議員 1 人		収益激減
大槌町社協	会長、理事 2 人(事務局長含む)、評議員 6 人、職員 5 人(総務課長含む)	流失	ホームヘルプ、訪問入浴、地域密着の基地流失
釜石市社協	理事 1 人、職員 1 人	社協入居建物浸水	収益激減
大船渡市社協	評議員 1 人	建物一部損壊	収益激減
陸前高田市社協	会長、副会長、理事 3 人(事務局長含む)、評議員 5 人、職員 5 人(次長含む)	流失	デイサービスセンター流失

被災地の市町村社会福祉協議会の状況

No	名 称	設置日 (平成23年)
1	岩手県災害ボランティアセンター	3月11日
2	盛岡市災害ボランティアセンター	3月25日
3	宮古市災害ボランティアセンター	3月13日
4	宮古市田老地区災害ボランティアセンター	4月18日
5	大船渡市社協災害ボランティアセンター	3月12日
6	花巻市災害ボランティアセンター	3月15日
7	北上市災害ボランティアセンター	3月15日
8	久慈市社協災害ボランティアセンター	3月19日
9	遠野市災害ボランティアセンター	3月16日
10	一関市災害ボランティアセンター	3月29日
11	陸前高田市災害ボランティアセンター	3月17日
12	釜石市災害支援ボランティアセンター	3月14日
13	二戸市災害ボランティアセンター	5月1日
14	八幡平市災害救援ボランティアセンター	3月30日
15	奥州市社会福祉協議会災害救援ボランティアセンター	3月11日
16	零石町災害ボランティアセンター	4月1日
17	滝沢村社会福祉協議会災害ボランティアセンター	5月30日
18	紫波町災害ボランティアセンター	3月14日
19	金ヶ崎町社会福祉協議会災害ボランティアセンター	4月1日
20	平泉町災害ボランティアセンター	6月1月
21	住田町災害ボランティアセンター(住田基地)	3月14日
22	大槌町社協災害ボランティアセンター	3月29日
23	山田町災害ボランティアセンター	4月9日
24	岩泉町災害ボランティアセンター	3月11日
25	軽米町社会福祉協議会災害ボランティアセンター	3月24日
26	野田村災害ボランティアセンター	3月19日
27	洋野町災害ボランティアセンター	4月1日

[岩手県における災害VC設置日一覧]

ら、復旧に向けてボランティアの力を求めようと、災害ボランティアセンター（以下、「災害VC」という）が順次設置されました。

多くの市町村社協が初めて災害VCを設置することになり、運営ノウハウがないため戸惑いが多くありました。支援Pや全国各地から派遣された社協職員の協力で、限られた資機材を活用したニーズ調査、住民からのボランティア活動依頼の受け付けを行い、ボランティアの受入を開始しました。

内陸部の市町村社協も、多くの市町村で災害VCを開設し、地元の被害状況の確認、避難所運営等を行いました。同時に内陸部から多くの方々が災害支援活動のために沿岸部を支援しました。

災害VCの開設運営には、支援Pの功績が大きく、ボ

ランティアセンターの事務用プレハブやリース車両の提供のほか、マイクロソフトの提供を受けたパソコンの貸与の他、インターネット接続網の整備など、時宜を得た対応を過去の経験に基づき的確に対応され、沿岸部の市町村社協は支援Pを頼りにして、復興支援活動を行いました。

(3) 沿岸部市町村社協 災害ボランティアセンターの取組み

① 災害ボランティアセンターの活動

沿岸各地の災害VCには、浸水地域の泥出しや瓦礫の撤去、床下の洗浄や家財道具の運び出しなど多くのニーズが住民から寄せられ、大勢のボランティアが対応しました。

まだ漂着物の片づけが終わっていない屋外での作業が主となり、活動場所では釘の踏み抜きや切り傷などのけがが頻発したことから、事故対策として、ボランティア募集時や、活動前のオリエンテーションで、鉄板入りの長靴、厚手の作業用手袋の着用、帽子、ヘルメットの着帽を呼びかけた他、けがをした際には破傷風予防のため、必ず病院で受診することを徹底しました。

けが防止の用品等の手配を、県社協がまとめて手配する場合もありました。

夏場は熱中症の注意を促し、熱中症予防のチラシを作成し各センターに掲示するとともに、水分を多く準備したり、県社協が中共募の災害等準備金や支援Pの支援を受けて準備した、塩あめや冷却スプレーの利用を進めるほか、暑い時間帯には、休憩時間を頻繁に設けるなどの対策を取りました。

また、日本赤十字奉仕団の方や看護師の方には専門性を活かし、活動者への注意やけがをした際の対応に協力頂きました。

その他、支援Pからは、災害VCにタンク入りミネラルウォーター、保冷剤として兼ねて使用可能なペットボトルを凍らせる大型冷凍庫の提供も受けました。

各災害VCには地域からいろいろな活動依頼が寄せられ、様々な活動を行いました。

浸水地域も広域で、長期に渡る活動が必要になりました。

県社協でも多くの方にボランティア活動をお願いしたいと考え、ボランティア募集チラシを作成。企業やこれまで参加した団体に、また岩手に来て、被災地支援の想いを共有しながら活動して欲しいとのメッセージを込めて、チラシを送りました。

ボランティアのみなさんへ
岩手県災害ボランティアセンターからのお知らせ

暑い季節!! 热中症に気をつけましょう

あなたの“真心”は、
被災地に勇気を与えて下さっています。心から感謝。
だから、頑張り過ぎないで！
我慢し過ぎないで！！

チェック 热中症の予防のために

- ▶ 水分・塩分補給が大切です。
こまめに水分をとっていますか？
のどの渇きを感じなくともこまめに水分補給をするようにしましょう。
また、水分とともに塩分（スポーツドリンク、塩あめなど）も補給しましょう。
- ▶ できるだけ暑さを避けましょう。
室外での活動ではヘルメット、帽子を必ずかぶって作業しましょう。
- ▶ 風通しの良い服を着ましょう。
次の方は注意しましょう
食事を抜いたり寝不足の人、風邪などで発熱している人、
下痢などで脱水症状の人、肥満の人、心肺機能や脳機能が低下している人、
自律神経や循環機能に影響を与える薬物を飲んでいる人など
熱中症になりやすいので特に注意しましょう。

[热中症予防注意喚起のチラシ]

宮古市社会福祉協議会
災害ボランティアセンター
を開設しました！！

～ボランティアがお手伝いします！ボランティアを派遣します！～

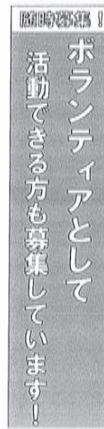
こんなお手伝いをします！！

○ガレキの片づけ、汚泥の撤去、ごみの運搬など

○荷物の運搬などの力仕事、日用品の買い物など

○高齢者や障がい者のお世話、子どもの遊びや一時預かり

その他ボランティアでできることがあればご相談ください



申し込み問い合わせ **090-4478-3984**

3月17日から受付いたします

～派遣を依頼する方へお願い～

ボランティアの皆さんへは、被災した方々のお手伝いをしたいという気持ちから集まっていますので、以下の点をご了承ください。

①専門的技術を要したり危険を伴う作業など、ご要望にお応えできない場合があります。

②ボランティア参加の都合で、すでにご要望にお応えできない場合があります。

③ボランティアは無料です。食事の用意なども不要です。

宮古市災害ボランティアセンター

場所：宮古市総合福祉センター

宮古市社会福祉協議会
住所：宮古市小山田二丁目9-20
電話：0193-64-5050
FAX：0193-64-5055

[市町村社協災害VCチラシ]

～被災地復興のため～にあなたができること～

岩手県災害ボランティア活動支援のお願い

岩手県では、一日も早い被災地の復旧・復興に向け取り組んでおりますが
その道のりは決して短いものではありません。
今後とも、被災者と被災地に寄り添う支援を引き続きお願いいたします。

岩手県内災害ボランティアセンターのホームページはこちらから
<http://www.iwate-shakyo.or.jp/>

* ボランティアバス運行中 !!! 岩手県ボランティアセンターや内部の市町村災害ボランティアセンターでは沿岸被災までのボランティアバスを運行しています。

* いわて GINGA-NET プロジェクト <http://www.iwateginga.net/>

☆野田村災害復興ボランティアセンター 080-5949-8093	☆宮古市災害ボランティアセンター 090-4478-3984	☆山田町災害ボランティアセンター 0193-89-7515
☆大槌町災害ボランティアセンター 0193-41-1555	☆釜石市災害支援ボランティアセンター 0193-22-2310	☆大船渡市災害ボランティアセンター 090-7320-6504
☆陸前高田市災害ボランティアセンター 090-2852-9736	☆遠野市災害ボランティアセンター 0198-62-8459	☆岩手県災害ボランティアセンター 019-637-9711

[ボランティア募集チラシ]

要確認! ボランティア活動～その前に～

活動の注意事項

- 依頼者の自宅に着きましたら、「**大槌町災害ボランティアセンターから来ました**」と伝えてください。
- 作業依頼内容の確認**
※ 依頼内容が違う場合⇒ボランティアセンター(080-3518-8490)に確認！
 - トイレ利用の確認
 - 土足作業の確認⇒釘や角材などが散乱した屋内作業の依頼の場合
 - 休憩取得厳守 ⇒ 事故防止のため、1時間に1回(10分程度)の休憩を！
 - 水分・塩分(塩貯等)の補給 ⇒ 热中症予防
 - 避難経路の確認 ⇒ 余震が発生した場合は、津波情報を確認し避難を！

活動前の確認

- 医療・装備確認**
 - マスク、ゴーグル等の防護具
 - 長袖、長ズボン、長靴（安全靴が望ましい）、軍手
- 体調管理**
作業を行うことに心配なことがあるとき ⇒ 必ず相談してください。
- 食中毒・感染症予防**
 - うがい・手洗い（アルコール消毒）の徹底
- 事故が発生した際の手順を確認しましょう。**
 - 切り傷等は流水でよく洗浄し、消毒薬で入念に消毒。傷口の治りが悪い、傷口が化膿した場合は、直ちに病院へ受診（大槌病院：090-3127-2507）
 - 大きな事故が発生した際は、直ちに救急車を要請し、救急搬送を！

事故が発生した時は、発生現場の状況を必ず！
サテライトリーダーとボランティアセンターに報告!!
TEL : 080-3518-8490

今日も1日、怪我や事故がないよう！よろしくお願ひいたします。

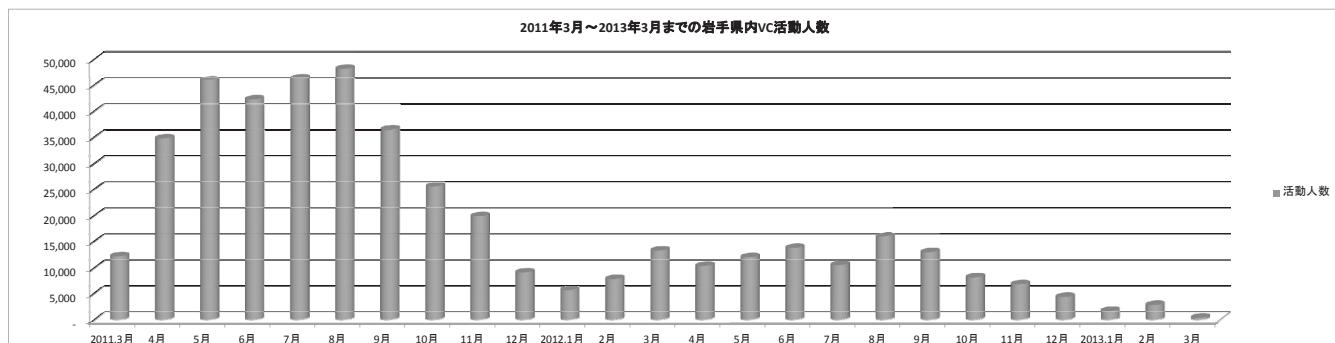
[事故防止を喚起したオリエンテーション資料]



[民家の泥出しを行うボランティア(大槌町)]



[写真洗浄作業(大槌町)]



② 災害ボランティア活動から復興支援への移行

岩手県は県土が広く、かつ内陸部から沿岸部へ続く高速道路もなく、沿岸までの移動に片道2時間半から3時間を要します。

発災当初、車両燃料の供給が制限されていたことや、継続して活動するための宿泊場所の確保が難しく、テント泊をしようとも公園が仮設住宅建設用地のため立入禁止で、沿岸部の宿泊施設も営業する施設が少なく宿泊が難しいことから、特に県外からのボランティアの受け入れができずにいました。

高速道路の利用が再開され、物流が少しずつ元に戻り始め、必要な資機材が届きはじめ、内陸部でも宿泊施設が営業を再開した3月下旬から、ボランティア受入体制が整い始めました。大規模な災害発生に伴う災害VCの運営は全国から派遣された社協職員から学びながら行われました。

発災後初めての大型連休を迎えた平成23年5月のボランティア活動者は4万人。その後8月には4万5千人を超えるました。被災者が求める復旧のため依頼されたニーズの変遷とともに、活動内容、受入れ体制を変化させながら、2013年3月11日時点で延べ44万7500人が活動しました。

《活動内容の推移》

発災から6月頃までは、主に、避難所支援、物資の

仕分け、炊き出し、がれき撤去などを中心に活動しました。仮設住宅への引っ越し始まった7月からは、引越しの手伝い、大学生によるボランティア活動の他、仮設住宅団地という新たな地域（コミュニティ）での暮らしを支えるため、ふれあいいきいきサロンが開催されるようになりました。

がれき撤去、泥出しや引っ越し補助のニーズは、当初から継続的に挙げられましたが、並行して徐々に被災者一人ひとりに寄り添う生活支援活動の需要が高まってきたことから、2011年9月以降、各災害VCの名称を復興支援センターなど、地域ごとの名称へ変更しました。

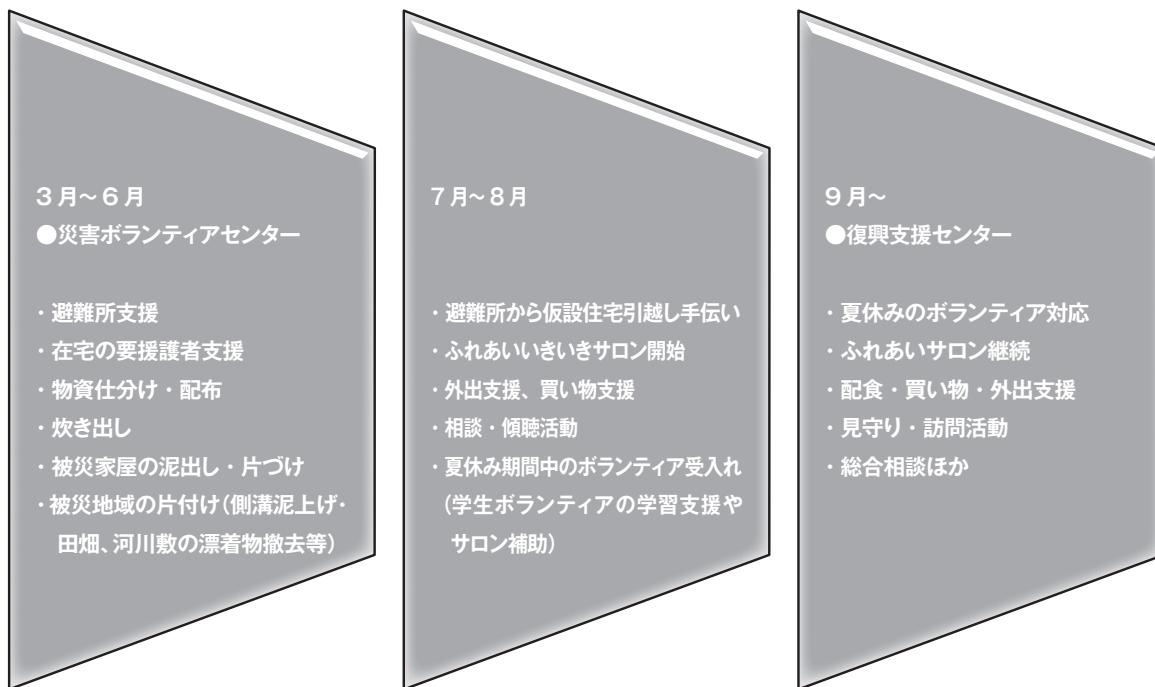
(4) 県災害ボランティアセンターの活動

① 情報発信

県災害VCには電話回線が復旧した3月12日以降、県内外関係機関・団体やボランティア活動希望者等からの問合せが絶え間なく寄せられました。「被災地でボランティア活動をしたい」「力になりたいがライフラインはどうなっているのか」「支援物資はどこに送ったらよいか」「避難所情報を知りたい」「人を探している（安否確認がしたい）」など内容は多岐にわたりました。

沿岸現地の様子が不透明の中での対応は具体的な話ができず、見通しも立たなかつたため、具体的情報

支援活動内容の推移



を知りたい相手方と押し問答を繰り返すことも珍しくありませんでした。

最新の情報を入手するには、現地と直接連絡を取ることが一番ですが、沿岸部市町村では4か月以上固定電話の回線が不通のままの地域もありました。

内陸部では2、3日後には電話回線が復旧しましたが、また建物被害を免れた社協でも対外的な問合せ番号を統一する必要がありました。

そこで、当時沿岸部で比較的に通信状況が良好と言われたKDDIに相談したところ、携帯電話20台の無償貸与を受けることが出来ました。

被災地の現状を分かりやすく伝えるため、公式な情報を発信する必要があると感じ、3月13日、発災前から開設していたボランティア・市民活動センターのブログ及び県社協のホームページを通じて、情報発信を開始、以降随時更新しました。

沿岸部の災害VCでのボランティアの受入が増えることに伴い、情報量が増えてきた平成23年8月、東京都のNPO法人「かものはしプロジェクト」の協力を得て県災害VC専用ホームページ「明日へ進もう!!いわて」を開設しました。

このホームページは、ボランティア活動状況、募集情報の他、沿岸各災害VCで立ち上げたホームページ、ブログのリンク集、活動先VCのマップ、県内で活動したボランティアと現地に住む住民の声などを掲載しています。

時間の経過とともに、地域ごとに少しづつ移り変わる活動内容や、現地の状況について正しく伝わらず、電

話照会を受けて訂正するということも度々ありました。

日頃から、情報発信を心がけ、慣れておくこと、発信する際の情報統一が必要だと感じました。

現地の混乱を避けるため、そして沿岸部に住む住民やボランティアとして岩手に来て下さった方の笑顔のために、県災害VCホームページから復興支援情報サイトとなつた現在でも、試行錯誤しながら運営しています。

「明日へ進もう!!いわて」には、「震災が起きたという現実を受け止めながらも、まずは前を向いて一日一日明日へ向かって進んでいこう」という意味が込められています。

これは、災害VCを運営するにあたり、何かスローガンを掲げようと考えて決めたものです。

② ボランティア保険

ボランティア活動をする際、参加者にボランティア活動保険に加入後の活動を求めますが、被災地の場合は天災タイプの加入を薦めています。

今回の発災で駆け付けたボランティアが被災地でボランティア保険に加入する際、掛け金の個人負担をどうするかが課題になり、災害支援実践者の情報を鵜呑みにし、当初、掛け金の個人負担を取らずに加入手続きを行いました。

過去の例を鵜呑みにして確認を取らずに自己負担なしと周知したことは課題となりました。災害時の情報錯そうは良く起こりますが、確認することが大切だと反省させられます。



明日へ進もう!! いわて

◎ サイトマップ

支援を必要と
されている皆さんへ

▶ お知らせ ▶ ボランティア募集 ▶ 三陸だより～現地からの声～ ▶ よくあるご質問 ▶ お問い合わせ



お知らせ

- ④ 2013.09.11 9月8までの県内復興支援等VC活動人数一覧
- ④ 2013.09.05 【北上市災害復興支援VC】ボランティア募集
- ④ 2013.08.23 北上市社会福祉協議会ではボランティアバスを運行します！募集終了
- ④ 2013.08.21 滝沢村社会福祉協議会からボラバスのお知らせ
- ④ 2013.08.12 岩手県社協災害対策本部からお知らせ！
- ④ 2013.08.11 矢巾町災害ボランティアセンター ボランティア募集について
- ④ 2013.08.10 雲石町災害ボランティアセンター 災害ボランティア募集について
- ④ 2013.08.10 盛岡市災害ボランティアセンター ボランティア募集について
- ④ 2013.08.06 一関市東山地区の豪雨災害ボランティアについて－募集終了－
- ④ 2013.05.28 サマーチャレンジやまだ2013運営ボランティア募集要項

[▶ お知らせ一覧はこちら](#)

検索

ボランティア活動先VCプロダクション

- 岩手県沿岸部市町村社協
ボランティアセンター
- ④ 陸前高田市社協ボランティアセンター
- ④ 大船渡市社協復興ボランティアセンター
- ④ 釜石市社協 生活ご安心センター
- ④ 大槌町社協 ボランティアセンター
- ④ 山田町社協復興支え愛センター

[明日へ進もう!! いわてホームページ]

がれき撤去作業や炊き出し等、通常のボランティア活動よりもけがのリスクは高い中で、保険加入は活動者、受入れ側双方にとっての安心につながりました。

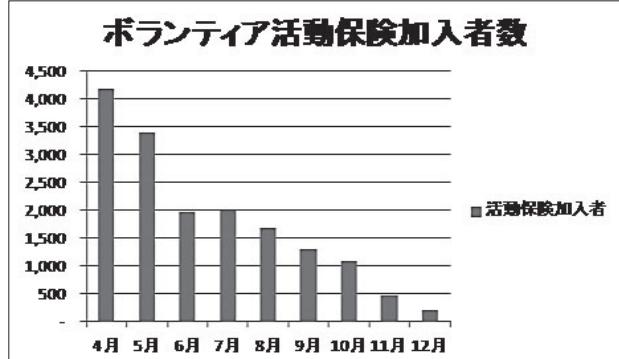
事故報告件数は、平時に比べ増加し、特に釘の踏抜き、擦傷、切傷が多く、中には熱中症、骨折などのケースもありました。

活動中のけがだけでなく、活動先までの往路復路も補償対象となっているため、保険に入っているから安心というだけでなく、自分がこれからどのような活動に行くのか、意識づけをするためにも出発地での加入を呼びかけましたが、実際は、現地での受付も多くありました。

現地災害VCの事務負担軽減のため、簡素化された受付用紙を利用した他、現地受付窓口では保険料の徴収を行わず、県社協で沿岸7市町村社協分の受付名簿を取りまとめ、保険料を一括して中共募「災害ボランティア・NPOサポート募金」に申請しました。

ボランティア保険の補償期間は单年度で、年度が変わる直前に震災が発生したことから、平成23年3月に一度加入了の方へは、平成23年4月にまた再度、1年間の加入の呼びかけが必要となりました。

夏休みにバスでやってくる多くの学生ボランティアの中で、ボランティア保険を毎年4月に掛けるものであるこ



県社協および沿岸7市町村で2011年4月～12月までに受付をした人数

平成24年度 ボランティア活動保険加入カード	
加入者名	様
(団体・グループ名))
加入プラン	A · B · 天災A · 天災B
補償期間	平成 年 月 日～平成25年3月31日
社会福祉法人 全国社会福祉協議会	

ボランティア活動保険加入者には加入証明としてカードを交付しました。(制作:全国社会福祉協議会)

とを知らずに被災地で活動に従事する学生がみられました。そのため、被災地での活動開始前に加入状況の確認は大切です。特に学生が関わる可能性が高い学習支援の一環として野外で運動した際、子供がけがをする場合も想定されることから、保険加入状況の確認は、受入れ側として重要な作業となります。

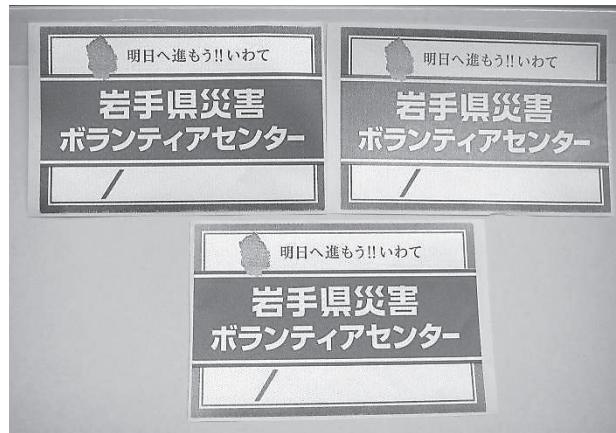
災害時も平常時と同様に、ボランティア活動保険への事前加入、年度が変わったら再加入することの周知徹底が課題です。

③ ボランティアシール

これまでの災害発生時は、ボランティアは、受付時にガムテープに名前を記入し、被服に貼り付け氏名表示して活動していましたが、社協が運営する災害VCに登録をしたボランティアであることがより分かりやすいよう、今回の災害では、ボランティアシールを作成し、それを貼ってもらいました。

被災地には、多くの人々が訪れたため、被災地ではボランティアの区別がつきにくく不安だという声が寄せられてたことからシール表示の案が出されました。

4月上旬に15万枚、5月下旬に9万枚、8月下旬に10万枚、計34万枚を作成。活動開始時に日付、活動市町村、名前を書き入れてもらい、腕や胸に貼り付け、



[ボランティアシール3種類]



[ボランティアシールを貼って活動]

釜石市ぬくもり新聞 第4号 2011年5月13日 釜石市災害支援ボランティアセンター発行

お困りごとはありますか？ ボランティアがお手伝いします！

例えばこんなこと…

仮設住宅などへの引越し
「高齢などのため自分で引越しの準備ができない！」
ボランティアは、専門業者ではないため万全ではありませんが、最善の注意を払いながらできる範囲でお手伝いいたします。

泥だしや家財の運び出し・整理など
「自宅の泥だしや家財を運びださなくてはならないのだけれど…」
ボランティア活動が安全に活動できるかどうか、事前訪問を行い、できる範囲でお手伝いいたします。

こんな悩みも…

- ★ 避難所や仮設住宅で話相手になってほしい！
- ★ 避難所の子どもたちの勉強を見て！一緒に遊んで！
- ★ 避難所生活で散髪や鍼灸・マッサージに通えない！
- ★ 避難所で炊き出しや娛樂などの催しをしてほしい！
- ★ 仮設住宅の近所のことが知りたい！

ボランティアが **無料** でお手伝いいたします。
食事や謝礼などを求めることはできません。

活動するボランティアは…
ボランティアセンターのボランティアはワッペンを付けて活動しています（県が認めた証です）。
被災地で組織化されないで動くボランティアと区別し、安心してボランティアを受け入れてもらえるように作りました。
個人宅へ派遣する場合は他に指示書も発行しています。

ボランティアの依頼にあたってのお願い…

- なるべく、依頼されるご希望日の前日の午後4時までにご連絡下さい。
- 活動内容を確認するため事前訪問し、活動が可能かどうか判断をさせていただくことがあります。
※ 専門的技術を要する内容や危険を伴う作業などはご依頼をお断りすることもあります。
- ボランティアの参集人数や天候により、すぐにご要望にお応えできない場合もあります。

ボランティアさんには手伝ってもらいました！

～「ご自宅の床下の泥清掃」をお願いしたAさんの声～

「ボランティアさんって今まで知らなかつたんですよ。お手伝いをお願いするだけと思ってたけれど、こうして人と人が会って、つながって…何だかうれしくなりますね」

そのほか、ご不明なことがございましたら、ご気軽にセンターまでお問合せください。

☆お問い合わせ先☆

釜石市災害支援ボランティアセンター

釜石市鈴子町15-2 シーブラザ大型テント前

TEL:090-1361-6097 [ボランティア派遣の専用電話]
090-1361-6201
0193-22-2310(代表)

FAX:0193-22-4650

[釜石ぬくもり新聞 4号 ボランティアワッペンを紹介]

作業に従事してもらいました。

全国、また世界中から岩手県に多くのボランティアが駆け付けましたが、同じボランティアシールを貼り活動する様子は、被災地を想う心と活動者の絆を感じる光景でした。

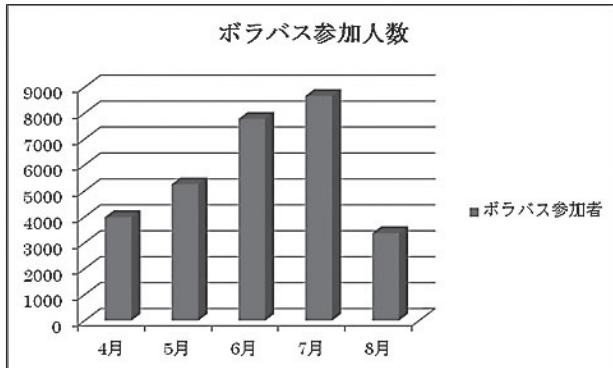
同じボランティアが何枚も活動日別のシールを貼って活動する姿は、被災地活動の勲章にも見えました。

一方、マスコミからは、社協受付登録以外のボランティアの身元をどう証明するか課題と提言も受けました。

④ボランティアバスの運行

県内外からのボランティアの受入れは3月下旬から始まりましたが、沿岸部に宿泊場所がないことが課題でした。食糧調達や衛生面の体制も不安定だったため、全国から集まるボランティアが安全に活動するためには、内陸から朝出発し、沿岸部で活動して夕方内陸へ戻り宿泊するという活動形態が、当時一番望ましいものでした。

中越沖地震の際も運行されたボランティアバス(通称:ボラバス)の手法が支援Pから情報提供されました。



[ふれあいランド岩手でバスに乗車するボランティア]

実施主体	運行計画・調整	ボランティア募集	受付	運行・実施
県災害VC	沿岸市町村(山田町・大槌町・陸前高田市)と1週間単位の運行計画を相談。 運行日と定員数を決める。	県社協HP、新聞等で告知	参加希望者は名鉄観光サービス(株)盛岡支店へ連絡 名簿を県社協へ	添乗 ふれあいランド岩手職員 名鉄観光サービス(株)社員 オリエンテーション バス車中及び現地VCスタッフ

陸前高田市で活動する災害ボランティア 募集

ボランティア申込先(受託) 名鉄観光サービス(株)盛岡支店

【TEL】019-654-1058

参加する場合は、必ず、事前の申込連絡をお願いいたします。事前予約なしの当日参加はお受け出来かねますのでご了承願います。

※申込受付時間:

・平日(月曜日～金曜日) 午前9時から午後8時まで・土曜・日曜・午前9時から午後6時まで

※募集が芳賀となった場合は、土日の問い合わせは終了となりますのでご了承願います。

※当日の空き連絡番号は、080-1552-5576になります。こちらの連絡先からのお申込みは出来かねます。

東日本大震災が被災地支援として、陸前高田市では土砂等の撤去作業を行うボランティアを募集いたします。現地陸前高田市までは貸切のボランティア送迎バス(ボラバス)を下記の通り、運行いたします。多くの方々のご参加をお願いいたします。

1 日 程

1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目
6月25日 (土)	6月26日 (日)	6月27日 (月)	6月28日 (火)	6月29日 (水)	6月30日 (木)	7月1日 (金)	7月2日 (土)	7月3日 (日)
定員40 名	定員40 名	定員40 名	定員40 名	定員40 名	定員40 名	定員40 名	定員40 名	定員40 名

※各日とも定員40名で、先着順でお受けいたします。

2 集合場所

(1) 盛岡駅マリオス1階正面

発車時間: 6時40分出発

(2) ふれあいランド岩手(住所: 盛岡市三本柳8-1-3)

発車時間: 7時00分出発

(3) 留意点及び運行予定

①お申込み時は、上記集合場所のどちらから乗車するかお知らせください。

②発車時間10分前に集合願います。ふれあいランドは、自家用車駐車が可です。

③往路陸前高田市到着は、10時頃の予定。復路陸前高田市 16時出発、盛岡駅着は19時頃。

3 活動場所・内容

活動場所: 陸前高田市内

※ 当日、現地災害ボランティアセンターに到着時、現地の活動場所をお知らせします。

主な活動内容: 市内の土砂・ごみの撤去

※ 清掃が充分想定されます。合羽等を準備し着用され活動されるようお願いします。

※ 天候等の事情により、活動時間の短縮または中止となることがありますので予めご了承願います。

4 持ち物・装備等

昼食(飲料水)、作業着、合羽、長靴(安全靴)、ゴム手袋・軍手、スコップ、マスク、帽子、身分証明書(運転免許證等)、作業着の着替え等

※ 靴の踏み抜きなどの危険もあり安全靴や鉄板入り長靴の用意が望ましいこと。

※ ご希望に応じ500円で当日の昼食をご準備致します(おにぎり弁当に飲料)。料金は当日集金いたします。

5 ボランティア活動保険料

現在の居住地の社会福祉協議会にて天災Aプランに加入してください。

※ 被災地でのボランティア活動中の万が一の事故に対しての補償保険費用です。

6 審査人員

各日定員40名(申込み先着順)※各日とも定員になり次第、締め切り。

7 主催

岩手県災害ボランティアセンター

[ボランティアバス募集チラシ]

災害ボランティアバス引率要項

○ 委託会社

・「名鉄観光サービス(株) 盛岡支店」(盛岡市門)
・TEL 019-654-1058 FAX 019-654-1044

○ バス発着時刻の見込み

・【往路】 午前6:30 マリオス1階正面発
午前6:50 ふれあいランド岩手発
トイレ休憩(遠野市 風の丘)(川井村 やまびこ館)
午前9:30 現地
※ 大槌町 桜木町福祉センター→大槌町社協害ボランティアセンター着
※ 山田町 山田町役場(25名)
※ 山田町 B&G海苔センター(残)

・【復路】 午後4:00 山田町 大槌町 発
(トイレ休憩 (遠野市 風の丘)(川井村 やまびこ館))
午後6:40 ふれあいランド岩手 着
午後7:00 盛岡駅 着
※ 【往路】は、ボランティアが遅い次第、現地を出発すること。

○ ボランティアへの配付物品積込み

・配付品積込みは、ふれあいランド岩手で行う。

○ 配付物品

ボランティアのシール — 配付は【往路】発車後
マスク、手洗用の水 — 適宜持つてもらう。
栄養剤、ミネラルウォーター — 配付は作業終了後

○ 往路バス内でボランティアのグループ(5人1組)分け、グループのリーダーを決める。
リーダーは現地到着したら速やかにセンターで作業内容をマッチングしてもらう。

・作業は、ボランティア5人がグループの単位で実施すること。

○ ボランティアのシールへの記入

・ボランティアから、シールに次の事項を記入してもらう。

○ 号車、○グループ、氏名、「リーダー」は氏名の前に印をつけかかる様にする。

○ ボランティア活動保険料

未加入の人は加入手続きをとる。

○ 作業

・グループのリーダーは、災害ボランティアセンターに到着したならば、受付で、作業に関する具体的な指示を仰ぐこと。
・作業時間: 午前10:00~12:00、午後13:00~15:00

■ 災害ボランティアセンター連絡先

080-3518-8490(大槌町)

090-3123-6208(山田町)

自分達にとっては現地の瓦礫かもしれないが、被災者にとっては財産、思い出の品物です。

大切に扱ってほしいと思います。

[ボランティアバス引率要項]

そこで、県社協で旅行会社に申し込みの受付から添乗まで委託をし、内陸から沿岸をつなぐボランティアバスの運行を開始。4月8日から8月31日まで運行しました。

運行までの流れは次のとおりです。

第1回目の運行日は平成23年4月8日～4月10日の3日間。各日とも定員80名とし、行き先は大槌町でした。

申し込み先を県災害VCとしたところ、ボランティア希望者からの電話が殺到し、すぐに定員に達しました。4月13日からの2回目以降は、名鉄観光がボランティアの受付先となり、連携を取りながら円滑な運営を行うことができました。

運行は1回につき80名～120名の定員とし、山田町、大槌町、陸前高田市での家屋内外の片づけ、泥出し、がれき撤去を行いました。5か月間で県内外から延べ29,056名が参加しました。運行に要する経費は、災害等準備金からの助成を受けました。被災地に負担をかけず、日中活動のみ提供する手法は岩手県内各地に広まりました。

《添乗した職員の記録から》

● 庭先の泥除け、瓦礫処理を行ってきた。ボランティアセンターも私たちも手際がだいぶ良くなってきて作業がはかどっている。何度も参加しているボランティアも多く、次の段取りを申し送りしてくれるので、安心して作業も出来る。

ただ、気を付けなくてはならないことは、あまりにも頑張りすぎることである。一人が頑張りすぎると他の方が無理してしまう。私の方からは、無理せず、けがに注意することを何度も伝えなければと思う。（平成23.4.21）

《ボランティアバス運行時の対応や課題》

色々な漂着物が流れ着いている田畠が活動場所な

ので、けがや事故のないように注意を払いましたが、残念ながら活動中に事故もあったことから、活動場所の見回りなど受入れ側が留意すべき点がありました。特に夏場、野外の活動は慣れない作業と遠路、夜行バスで移動参加することで、既に体力を消耗しているボランティアも想定されました。そんな中で、被災の様子に発奮し頑張りすぎてしまうボランティアが出ないように、活動の制限、適宜休憩を取るよう促すことは、受入れ側の務めであると思われます。

夏場は、昼食休憩時は涼しい車内で休んで貰うため、また昼食がいたまないよう、食中毒防止のため、冷房でバス車内を冷やしていました。

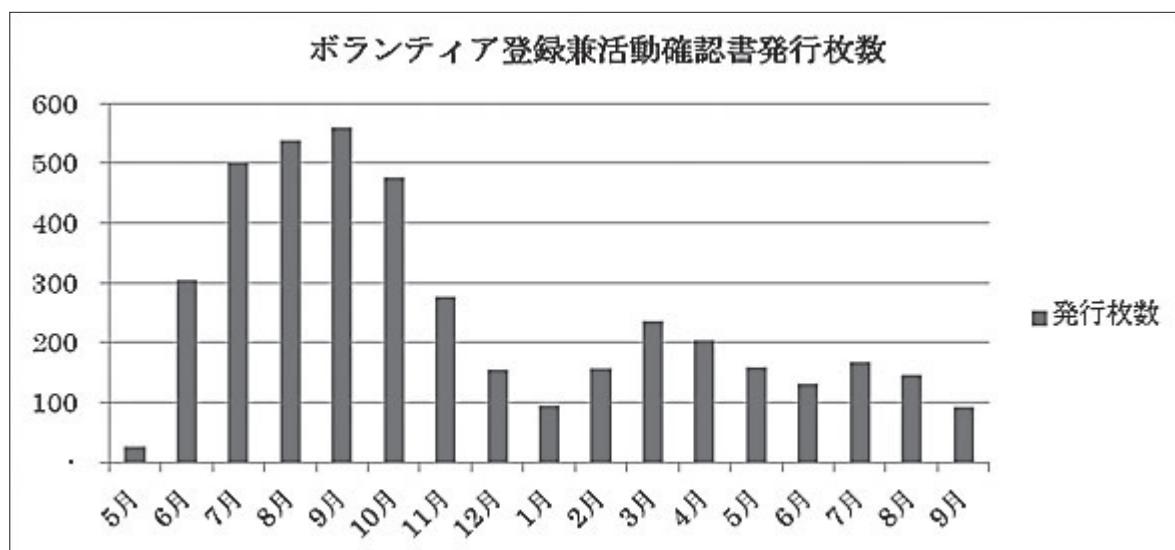
けがに備えた救急箱の持参や作業で汚れた手足、長靴等の洗浄用に、飲み水とは別途水を持参することが必要です。熱中症予防に飲料水のペットボトルを凍らせて提供するなど、暑い中で活動するボランティアに配慮する支援を考え実行しました。

平成23年の夏は、流出した冷凍魚等が散乱しハエの大量発生に悩まされましたが、腐敗した魚の片づけに従事したボランティアの被服や長靴に腐敗臭が染みついて、復路のバス車中で匂いが充満し、気分を悪くする参加者も出了ました。

活動者の中には、前夜に仕事を終え、ボランティアバスに乗車し、翌朝、被災地に到着という方もいました。夜を徹してきた方が被災地の様子を見て気持ちが高揚し、移動で疲れている中で活動を行い、体調を崩す方もいたことから、無理をしない活動をお願いしました。

⑤ ボランティア登録兼活動確認書の発行

東日本大震災では、従来、大規模災害発生時に災害救助法に基づき発令する「災害派遣車両の高速道路通行料金無料化制度」が、ボランティア活動に参加する



方の車両にも認められました。

各行政窓口で発行する「災害派遣等従事車両証明書」を取得して高速道路を通行する必要があり、証明書取得希望者は、窓口で活動先の災害VCへ事前に活動登録を済ませていることを証明する書類(ボランティア登録兼活動確認書)の提出を求められました。

活動確認書の発行は各災害VCの業務となりましたが、岩手県では、ボランティア受付を行う沿岸部VCの事務軽減のため、事前登録の確認及び活動確認書発行希望者との書類のやりとりを県災害VCが窓口となって行いました。

事前活動登録の有無を各市町村に確認することが必要となり、当初は電話照会で行っていましたが、日に何度も照会することで、県災害VCと現地災害VC双方の負担となったため、検討を重ね、各市町村VCにパスワード表を配付し、活動登録希望者に交付することで、パスワードの一一致により登録状況を確認することができるようにしました。

発行を開始した平成23年4月から終了した平成24年9月までに延べ4,174枚の確認書を発行しました。

⑥ マスコミ対応

発災当初から県災害VCには多くの問合せが寄せられ、マスコミからの電話取材等も頻繁に行われました。当初、各職員が対応していましたが、発信内容の統一

岩手県災害 VC 報道取材電話応対受付票				
業種	□新聞社	_____	新聞社	支局
	□テレビ局	_____		
	□ラジオ局	_____		
	□その他	_____		
電話番号	—	—	(相手先名字))
聞取事項	□報道等範囲	・地元紙、局のみ	・全国	
	□取材方法	・電話聞き取り	・VC本部来所(月 日 時頃希望)
		・現地取材(月 日 時頃希望)	
	□依頼された取材内容			
<例>				
□ボランティア受入状況確認 活動者数・一日当たり・ボラセン立上げからの延べ数 ボランティア活動内容 ボランティア活動者の推移(CWや学生の長期休暇の前後など)				
□ボランティア依頼状況 依頼内容など				
受付	平成 年 月 日 (曜日)	受付者名		
※①取材の依頼電話に対応した者は上記事項を聞き取り、確認の上、当該所属長または在庁の管理職に引き継ぐか取材対応の指示を仰ぐこと。 ※②取材対応した者は、答えた内容を枠内に箇条書きし、取材終了後は、県災害 VC 本部に提出すること。				

や、組織としての公式見解を伝えるため、部長以上の管理職対応を原則としました。

対応には、初期対応した職員が、問合せ内容を「報道取材電話応対受付票」に記載、その内容を所属長等に伝えます。受付票には、対応した内容を記入する欄を設けており、所属長等の回答内容も記録に残る形にしました。

そうすることで、回答を検討したうえで答えることができる他、同様の問い合わせがあった際に回答内容を統一することができました。

この仕組みは、平時のマスコミ対応時にも役立っています。

〈報道取材の時系列傾向〉

- 発災直後は県外ボランティアの受け入れをしていないことに関する照会
- ゴールデンウィーク前は、ボランティアの受け入れ体制に関する照会
- 夏休み前は、大勢来るボランティアの受け入れ体制についての照会
- 秋以降は、ボランティアの減少対策に関する照会

その他、避難所の閉鎖、仮設住宅の入居時、生活支援相談員の活動開始時など節目の出来事に合わせた取材も多くありました。

また、県社協側からも、韓国台湾まごころギフトのカタログ配布時や大槌町社協のまごころ宅急便利用開始日など情報提供し取材を促し情報発信した例もありました。

⑦ 沿岸ボランティアセンター会議の開催

発災後、各地で災害VCを運営する中で、各センターの活動やニーズ対応における課題が見えてきたことから、課題対応への情報共有や意思疎通を持つことを目的に連絡会議を開催しました。

今後起こりうるニーズの情報、活動団体の情報、各地に寄せられる同様の問合せに対する対応方法などを共有する機会となり、25年度現在も引越しニーズへの対応や、地元ボランティア育成に向けた取組みを検討するなど継続開催しています。





[発表の様子]



[平成24年2月 盛岡市にて内陸部社協ボランティアセンター担当者を交えた連絡会議を開催]



[平成23年4月 釜石市社協を会場に開催]



[大槌会場 相談員も加わった会議]

⑧ 県内工業高校生によるいわて車いすフレンズ活動について

平成15年度から取組んでいる県内工業高校等による車いす修理ボランティア活動「いわて車いすフレンズ」は、使われなくなった車いすの修理を行い、例年は、車いすを必要としているアジア諸国を始めとした海外に送る活動を行っていました。

平成23年度は東日本大震災で甚大な被害を受けた



[車いす修理講習会の様子]



[水沢工業高校 高田での活動の様子]

《車いす寄贈先一覧》

No.	施設名	寄贈台数
1	盛岡市立地域福祉センター（盛岡市）	5台
2	岩手県立療育センター（盛岡市）	5台
3	救護施設 松山荘（宮古市）	1台
4	障害者支援施設 わかたけ学園（宮古市）	1台
5	ワークプラザみやこ（宮古市）	2台
6	身体障害者授産施設 新生園（矢巾町）	2台
7	あさあけの園（矢巾町）	1台
8	ワークセンターむろおか（矢巾町）	1台
9	知的障がい者更生施設 ふじの実学園（一関市）	1台
10	太陽荘（軽米町）	1台
11	知的障がい児施設 奥中山学園（一戸町）	1台
12	障害者支援施設 つづじ（一戸町）	1台
13	障害者支援施設 こぶし（一戸町）	1台
14	JA新しいわて千徳デイサービスセンター（宮古市）	1台
15	特別養護老人ホーム 紫桐苑（宮古市）	2台
16	さんりくの園（大船渡市）	1台
17	介護老人福祉施設ひまわり（大船渡市）	2台
18	元気の泉デイサービスセンター（久慈市）	1台
19	大川目地区デイサービスセンター（久慈市）	2台
20	デイサービスセンター楓（久慈市）	2台
21	山根地区デイサービスセンター（久慈市）	1台
22	特別養護老人ホーム 和光苑（久慈市）	2台
23	特別養護老人ホーム ぎんたらす久慈（久慈市）	2台
24	グループホーム やすらぎの里（久慈市）	1台
25	特別養護老人ホーム 一関ケアサポート（一関市）	1台
26	関生園デイサービスセンター（一関市）	1台
28	軽費老人ホーム ケアガーデン高松公園（盛岡市）	4台
30	在宅複合型施設 在宅総合センターひだまり	4台
合計		50台

沿岸部を中心とした福祉施設に贈ることとし、活動を行いました。

平成23年11月10日にはふれあいランド岩手で「いわて車いすフレンズ修理技術講習会」を開催、64名が参加し、57台の車いすを修理、うち50台を各福祉施設に贈りました。

当日は、寄贈先の施設から職員の方に来ていただき、修理したばかりの車いすをその場で手渡すことができたことで、高校生にとっても自分たちの活動が役立っていることを実感する機会となりました。

また、水沢工業高校は日頃の取組みを活かし、奥州市内で被災地支援の自転車修理への参加や陸前高田市の高齢者施設を訪問し車いす修理を行うなどの支援を実施しました。

同校の生徒からは修理を終えて「ありがとう！」の感謝の言葉に「喜びを得ることができ、うれしかった」との声や、教職員からも「この活動を通じ、ボランティア活動に何ら抵抗なく入っていけたことは大きな収穫であり、成長の証である」との感想が寄せられ、活動を通じた支援の広がりを感じました。

⑨ ありがとうメッセージ(郵便事業株年賀寄附金配分)

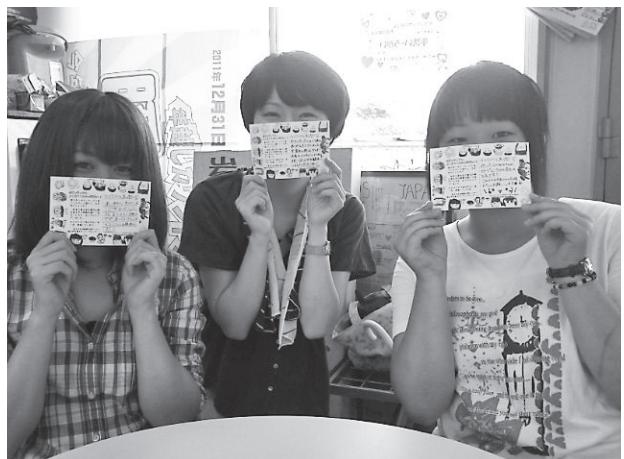
全国から駆け付けてくれたボランティアへ活動の感謝と、今後も継続的に訪れてほしいという想いを伝えるため、郵便事業(株)年賀寄附金配分の助成を受け、5市町社協(宮古市、大船渡市、大槌町、山田町、岩泉町)で「ありがとうメッセージ贈呈事業」に取組みました。

宮古市社協では、ボランティアまつりに来場した市民に呼びかけ、また宮古に来てもらえるよう、心を込めて、メッセージを書きました。

また、大船渡市社協ではボランティアフェスティバルを企画し、ありがとうメッセージハガキで開催を案内、多く



[大槌ありがとうメッセージ]



[宮古ありがとうメッセージ]

のボランティアが集まり、ボランティア同窓会が盛り上りました。

大槌町社協では、地元小学生が参加したボランティア研修会の中で、メッセージを書いてもらって、多くのボランティアに感謝の気持ちを伝えました。

山田町社協では、ボランティアへ継続した支援のお願

いと社会福祉大会の案内を、岩泉町社協は保育園、小学校、中学校の子ども達がそれぞれの想いを込め、岩泉を支援してくれた方々にメッセージを送りました。

ハガキを受け取った方から、お礼のハガキが届いたり、またボランティアに来てくれた方がいたりと、被災地支援の絆が深まりました。



[ありがとうはがき]

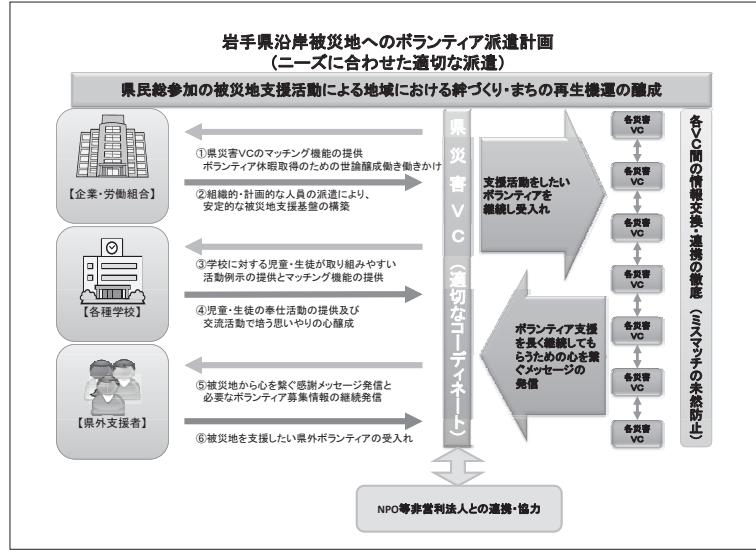
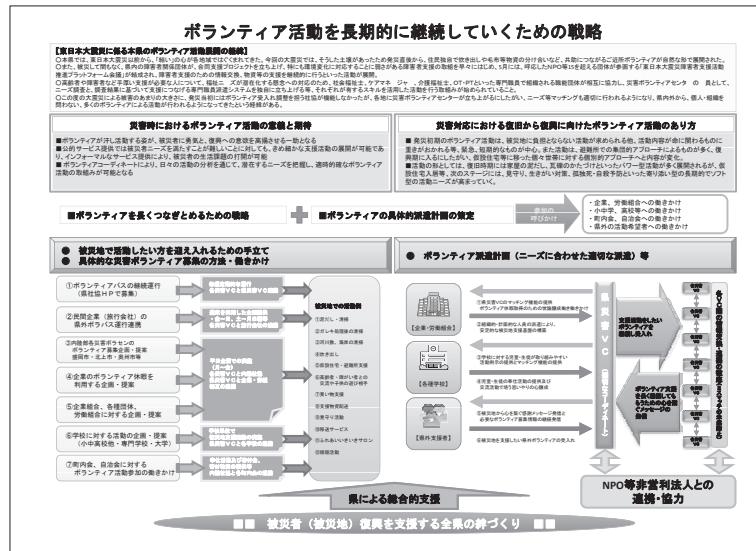
(5) ボランティア活動を長期的に継続していくための戦略立案

東日本大震災津波の発災後に、沿岸市町村
社協では役職員の喪失、本部事務所の流出等、
まさに混乱の真っただ中にありながら、社協ブ
ロック派遣で支援に入った職員や、支援Pの応
援により、順次、災害ボランティアセンターを開
設しました。

しかし、当初、ボランティアの受入れは、宿泊場所の紹介もできず、ニーズ調査もままならかってことから、自己完結型のグループ・団体を中心に受け入れました。そのため個人でボランティアに入りたい人からの苦情等を受けることも多く、また、一部報道機関には、岩手県の災害VCはボランティアの受入れに消極的…と報じられたりもしました。

このような声等に懸念した県の関係部署から、ボランティアの受入れが円滑に進むよう長期的な戦略を考えて欲しいという要請がありました。

このような動きなどを踏まえ、発災後2か月から戦略(案)の検討をはじめ、取りまとめたのが次の資料です。災害ボランティアセンター運営マニュアルもなかった段階での戦略検討であったことから、不十分ともいえる内容ではありますが、あの混乱期の中、何を考え何をどうしようとしていたのか、今後のために一つの資料として残しておきたいと思います。



特定非営利活動法人 Facilitator Fellows 理事兼事務局長
一般社団法人 Wellbe Design 理事長
篠原 辰二



東日本大震災発生から12日が経過した2011年3月23日。当時、新ひだか町社会福祉協議会（北海道）の職員であった私は、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（事務局：中央共同募金会、さくらネット）からの派遣要請を受け、災害ボランティアセンター運営支援者としての活動を開始しました。

沿岸地域に開設された災害ボランティアセンターの運営においては、日頃の社会福祉協議会(以下、社協)活動では想像がつかないほどの知識や労力、調整力や判断力が求められましたが、災害ボランティアセンターの運営を円滑に実践できたのは、岩手県社協をはじめ、全国から集結した社協職員の力強い継続的な支援があったからこそだと思います。

また、活動する市町村は異なっても、「地域の暮らしといのちを守る」という社協の一貫した信念や使命を支援者同士が共有し合うことにより、他の支援組織には真似のできない、「信頼」を地域住民から得られたことは、社協職員にとっても大きな励みになりました。

これからも震災で培った多くの経験と知識、信頼を更に育むことができるような復興への歩みを微力ながら応援させていただきます。

ボランティア活動を長期的に継続していくための戦略

岩手県社会福祉協議会（H23.6.8）

1 東日本大震災に係る本県のボランティア活動展開の経緯

- 岩手県では、この度の大震災以前から、各地域ではぐくまれてきた「結いの心」という土壤があったため、発災直後から、住民自らが被災者のための炊き出しや毛布等物資の分け合いなど、共助につながる活動が自然な形ではじめられた。
- また、被災して間もなく、県内の障がい者関係団体が、被災地に住む障がい者の支援のための合同支援プロジェクトを立ち上げ、環境変化に対応することに弱さがある障がい者支援の取組みを早々にはじめるとともに、5月には、呼応したNPO等15を超える団体が参画する「東日本大震災障がい者支援活動推進プラットホーム会議」が結成され、障がい者支援のための情報交換、物資等の支援を継続的に行なうといった活動が展開されている。
- そのほか、激しく痛んだ被災地ほど、高齢者や障がい者など、手厚い支援が必要な方々の福祉ニーズが陰に隠れてしまい、表に出てこないといった懸念があることから、社会福祉士、ケアマネージャー、介護福祉士、OT・PTといった専門職員で組織されている、いわゆる職能団体が、相互に協力して、災害ボランティアセンターの一員に加わり、ニーズ調査と、調査結果に基づく支援につなげる、専門職員派遣システムを独自に立ち上げるなど、それぞれが有するスキルを活用した活動を行う取組みが、地域に寄り添うような形で行われている。
- この度の大震災では、被害のあまりの大きさに、ボランティア受け入れの調整役を担う地域の社会福祉協議会が機能せず、当初は、被災地に負担をかけずに支援活動が展開できる組織・団体によるもののが主として行われた。しかし、各地に災害ボランティアセンターが立ち上がるにしたがい、ニーズ等マッチングも適切な形で行われるようになり、県内外から個人、組織を問わない多くのボランティアによる活動が行われるようになってきた。
- 発災以来、このような経緯をたどりつゝ県内でボランティア活動が展開されてきたが、その実際の規模は、各地の災害ボランティアセンターが把握している数の数倍の地域住民の方々、県内外の方々によって行われてきたものと思われる。
- これから復興までの長い道のりを考えたとき、今後のボランティアセンターの機能展開のポイントは、「結い」の心でつながる地元ボランティアの力と、被災地域外からのボランティアの力をしっかりとつなぎ、岩手ならではの「絆」として、醸成し強固なものにしていくことになるのではないかと考えられる。

○ 発災時の緊急対応、そして復旧へと進む過程では命に関わる対応に重きが置かれ、活動そのものは緊急・短期的なものを中心となるが、復興期のボランティア活動は避難所での集団アプローチとは異なり、仮設住宅に移った被災者個々に対する支援や、被災地で幸いにして住居を失う難を免れ、そこに暮らす一人ひとりへの丁寧なアプローチが求められる。そして、支援の内容も生きがい対策、生活支援、孤独死や自殺予防のための活動など、きめ細かさと長期的視点に立った活動へと、そのニーズが多様化・長期化へと向かっていく。

4 ボランティアによる支援を長くつなぎとめるための戦略等

○ 岩手県社会福祉協議会では、県の総合的な支援のもとに、これからさらにきめ細やかな支援が必要となる被災者（被災地）のため、次のような対象分野等に対して、ボランティア活動に参加しやすい体制づくり、企画提案、情報提供等を行うことによって、支援を長くつなぎとめる戦略を展開していくものとする。

- 復旧から復興への長い道のりを進んでいく過程では、その時に必要とされるボランティアニーズが変化しながら生えしていくもの。そのため、活動が一過性とならないよう、様々な企画、工夫をしながら、支援をしようとする人々の気持ちをつなぎとめていくことが重要。
- このため、ボランティア派遣計画を策定し戦略的な取組みを行う必要がある。

（1）小中学、高校等の学校への働きかけ

【戦略等】

- ・ 小中学、高校にむし、ボランティア体験学習の企画を積極的に提供する。
- ・ また、被災地支援の意向を有する学校に対しては、関係市町村の社会福祉協議会（災害ボランティアセンター）職員が、企画の立案から助言指導を行い、児童生徒の「助け合いの心」を醸成する体験学習の意義を高める奉仕活動や、被災地における児童生徒との交流など、適切なマッチングに基づいて、貴重な社会貢献活動等の機会を提供する。
- ・ 教育委員会に対し十分な説明とともに協力力を要請する。
- ・ 各種専門学校生徒、大学生のボランティア活動については、学校関係者との協議に基づいて、単位認定のことも含め、長期休業期間や週末を利用しての活動を評価してもらうなど、積極的に参加してもらえる環境づくりに向けた働きかけを行っていくなど。

（2）企業、労働組合への働きかけ

【戦略等】

- ・ 企業等の理解を得るため、新聞社等マスコミの協力を得て、社員等がボランティア休暇などを取得し活動に参加しやすい環境をつくっていく。
- ・ また、企業がボランティア休暇を制度化し、その社員が被災地で活動する様子等を取材し報道してもらう等を通じて、制度化の機運を高めていく。
- ・ 県経営者協会や労働組合等に対し、被災地でのボランティアニーズ、活動等の情報を積極的に提供することによって、活動への積極的な参加を要請するなど。

（3）町内会、自治会への働きかけ

【戦略等】

- ・ 市町村の協力を得ながら、地域における「結い」による活動について広く取り上げることによって、さらなる活動の活発化につなげていく（広報等）
- ・ 市町村社協が行動と連携し、ボランティア活動のコーディネートを行い、マッチングを含めた円滑な活動の展開に努める
- ・ 必要に応じて市町村社協がボラバス運行を企画など。

（4）県外のボランティア活動希望者に対する働きかけ

【戦略等】

- ・ ボランティアツアーや企画しようとする事業者に対し、被災地でのボランティアニーズに関する積極的な情報提供と、現地で必要な活動機材の提供について配慮する。
- ・ ホームページを活用したボランティアの募集を、情報の提供の仕方等に配慮しながら、継続的に展開していくなど。

（5）実行に移すための県・県社会福祉協議会における具体的な取組み

- ・ 地域で住民自分が取組んでいる、ボランティア活動の積極的な広報の展開
- ・ ボランティアバスの運行（可能な範囲で社協が経費負担する等、参加しやすい環境を整備）及びボランティアの募集
- ・ 県外からのボランティアバスツアーハーへの企画協力
- ・ 県内陸部の市町村社協からのボランティアバスの運行協力
- ・ 企業のボランティア活動の協力要請（行政の協力も得ながら働きかけを行う）
- ・ 労働組合への協力要請と活動の支援
- ・ 各種学校の協力を得るため、教育委員会等の関係機関に対する働きかけを行う
- ・ ホームページを活用した町内会、自治会へのボランティア参加提案
- ・ 県内外のNPO等団体との連携を強化など。

（6）ボランティア活動を円滑、効果的に行なうための支援体制

- ・ 県及び県災害ボランティアセンターと沿岸各センターとの確かな情報共有を図り、常に最新のボランティア募集状況、活動状況をホームページにより発信
- ・ ICTによる情報交換等機能の一層の強化とその効果的な利活用
- ・ 県社会福祉協議会における専任の担当職員による支援体制を強化（さらに必要に応じて増員を図り適切に対応）。

2 災害時におけるボランティア活動の意義と期待

- 被災地復旧・復興の主役はあくまで被災者であり被災地であること。
- ボランティアの存在は、汗し活動する姿そのものが、被災者（被災地）に勇気を与え、立ち直りに向けた取組み、気持の高揚につながるもの。

- 被災地の復旧・復興は、被災者（被災地）が主体となって進むものであり、ボランティアが主役ではない。
今回のよう被害甚大な状況下において、被災者が生活を立て直そうという気持ちを鼓舞することができる不容易に中で、市町村の内外から駆け付け、被災者宅の泥だし、清掃、敷地内の片づけ等に従事し、被災者の一刻も早い復旧支援のためを思って活動している姿は、被災者に勇気を与え、立直りの気持ちを高めてもらうきっかけとなるもの。
- また、ボランティア活動は、行政等公的機関が行う災害復旧だけでは対応しきれない、民家やその敷地内の復旧、河川敷や公的施設などの清掃活動など、きめ細かな復旧支援活動の展開が可能であり、公的機関が行うフォーマルなサービスでは対応できないインフォーマルなサービスを、ボランティア活動を通じて提供することによって、被災者の生活課題となっている状況を打開し、復旧復興への意欲の高揚に結び付けていくことができる。
- 災害時のボランティア活動には、平時では生じえない状況が起こり得ることから、ボランティアコーディネーターには、活動をより有効に機能させるために、インフォーマルな住民課題を掘り起こす高い能力が求められる。そのため日々の活動の分析を通じて、ニーズに気付き、ニーズに対応した活動が展開されるよう努める必要がある。被災地の復興には、長い道のりが必要であり、互助・共助のつながりが長く続けられるよう、丁寧できめ細かなコーディネーターに基づくボランティア活動の展開が求められる。

3 災害対応における復旧から復興に向けたボランティア活動のあり方

- スコップから、寄り添い・見守りへとソフトな活動へ移行。
- 短期的な活動から、息の長い長期的な活動へと内容が変化。

- 発災後の初期に求められるボランティア活動は、届強なボランティアの姿をイメージする。インフラに被害のあった被災地では、被災地に負担をかけない自己完結型のボランティア活動が求められる。しかし、インフラの復旧が徐々に進み、時間の経過とともに、活動はがれきの片づけ・泥だしといったパワーワークのものから内容が多様化し、たとえば、次のステージには、仮設住宅への入居開始とともに、高齢者世帯・独居世帯の見守りや、生きがい対策としてのふれあいサロン活動、傾聴ボランティア活動など、人と人との関係に基づく、いわゆるソフト型の活動ニーズが高まっていく。